

体育実技科目における時間割固定化の検証 —追手門学院大学1年生の春学期における学科クラスを基準とした時間割固定の事例—

松 井 健
辰 本 頼 弘
千 葉 英 史
巽 樹 理

Validation of timetable fixation in physical education: A case of timetable fixation based on faculty class in 1st-year spring semester of Otomon Gakuin University

Takeshi MATSUI
Yoshihiro TATSUMOTO
Eiji CHIBA
Juri TATSUMI

【キーワード】 大学生、体育実技、時間割固定

1. はじめに

大学における体育実技科目は、教養教育科目として位置付けられ、履修時の健康・体力の維持・増進のみならず、履修後の運動習慣やスポーツ実践に貢献することが指摘されている^{1,2)}。また、運動への興味・関心を失っている学生、運動実践へのきっかけをつかめていない学生への科目を通じたアプローチの重要性も指摘されている^{1,2)}。本学の体育実技科目もこれらの効果や課題を背景として、開学以来、様々な体育・スポーツ種目を教材とし、学生の実践の機会を提供してきた。現在は、「基礎体育1、2」、「応用体育1、2、3」および「余暇生活実習1、2、3」を体育実技科目として配置している。概ね春学期は全学で1,500名、秋学期は1,200名の履修者がある。一部の学部を除き、体育の講義や実技における2もしくは1単位取得が卒業要件に

なっているため、要件取得のための体育実技希望者は多い。特に1年生の履修率が高く、2017年度春学期の1年生は、1,873名(4月13日時点)の在籍があり、そのうち1,196名(63.9%)が春学期の体育実技を履修した。一方、2年生以上は全体で204名(13.1%)であり、2年生181名(1560名中、11.6%)、3年生12名(1613名中、0.7%)、4年生11名(1430名中、0.8%)であった。2年生以上の履修率は低く、特に3、4年生は学年人数の1%未満であった。これらの要因の一つとして、2016年度から始まった、1年生の春学期の時間割固定化の影響が考えられる。クラス制科目が各学部・学科で指定された曜日・時限配置となり、体育実技も固定化が行われた。ただし、体育実技は、固定された曜日・時限の中で、概ね3クラス(種目)の中から選択ができるしくみになっている。

本稿では、本学の体育実技科目の履修に大きな影響を与えていると考えられる1年次春学期の時間割固定化について、履修者数やアンケート結果から考察し、検証することを目的とした。

2. 体育実技の履修者数の現状

集中授業で行う余暇生活実習(1:ゴルフ、2:キャンプ、3:スキー)を除き、通常授業期の体育実技である、基礎体育と応用体育のクラス数と履修人数は、図表1の通りである。2015年までは春・秋とも全学年、全学科が混在する、抽選によるクラス編成であり、15回を1種目で構成する応用体育科目が約6割であった。しかし、2016年度からは、春学期の1年生クラスが各学部・学科の指定する曜日・時限に時間割固定化された。そのため、1年生に対しては、種目選択の幅が広まるよう、2種目で構成する基礎体育のみを配置することとした(1年生限定)。そのクラス数は2016、2017年度とも春学期が2015年度の2倍以上となっている。秋学期も約1.7倍となっている。一方、応用体育科目は、春に6、7クラス、秋に16～18クラスとし、年間クラス数を2015年度の約5割に削減した。2年生以上の学年は、春学期は応用体育のみと限定しているため、結果的に、2年生以上の体育実技履修者数が春は約6割に、秋は約8割レベルに減少した。

1年生履修者数は、入学定員増の影響で実人数では増加しているものの、履修延べ人数を基にした履修率で見ると、時間割固定化の前後で数%の変化に止まっている(1年生年間履修率)。体育実技全体の年間履修者数においても、入学生数の影響を受けて増減する傾向にある。

以上のことから、1年次春学期体育実技科目の時間割固定が履修者数に及ぼす影響は、1年生の履修者においては直接的な影響が少なく、2年生以上においては、年間を通じて顕著な履修者数の減少を引き起こしていることが明らかとなった。

図表 1 最近 3 カ年の体育実技授業の開講クラス数と履修人数

項 目	2015年度 ＜すべて抽選＞		2016年度 ＜春学期時間割固定＞		2017年度 ＜春学期時間割固定＞	
	春学期	秋学期	春学期	秋学期	春学期	秋学期
基礎体育クラス数	17	12	36	21	37	18
応用体育クラス数	23	20	7	16	6	18
学期合計クラス数	40	32	43	37	43	36
体育実技年間合計クラス数	72		80		79	
1年生履修人数（学期別）	1078	910	1019	917	1196	958
同上（年間）	1988		1936		2154	
1年生全休人数（4月時点）	1725		1594		1873	
全体に占める履修率：学期別（％）	62.5	52.8	63.9	57.5	63.9	51.1
同上：年間（％）	115.2		121.5		115.0	
2年生以上履修人数	332	167	195	226	204	197
2年生以上年間履修人数	499		421		401	
体育実技年間履修者数	2487		2357		2555	
体育実技全履修者に占める1年生の割合（％）	69.4		67.6		73.3	

※人数は延べ人数

3. 春学期 1 年生体育実技科目の時間割固定に関するアンケート調査

1 年生科目の時間割固定化は、入学後数日以内に科目選択をしなければならない新入学生の立場からすると、履修登録上のミスや選択への迷いを減らすことのできる有用な方法であると考えられる。スムーズな時間割の作成につながり、科目配置に関する教務上のメリットも大きい。本報告では、春学期と秋学期の両学期に体育実技を履修した 1 年生を対象に実技科目の時間割固定に関するアンケート調査を実施したので、その集計結果を報告する。調査の目的は、体育実技の時間割固定化に対する履修者からの評価、意見、改善点などを入手して、今後の体育実技科目のマネジメントに役立てることであった。

1) アンケート調査の方法

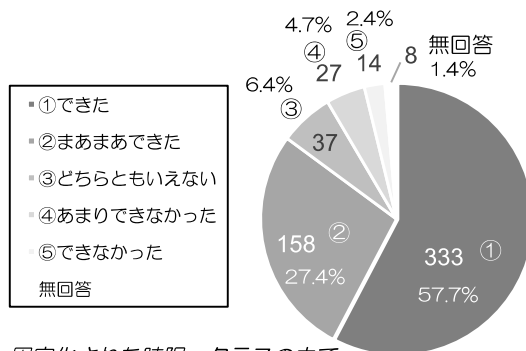
図表 1 に掲げた 2016 年秋学期の実技科目クラス、37 クラスに担当教員を通じて質問紙を配布し、調査を行った。属性については、所属学科のみを把握するため、学科を示すアルファベットの記入を依頼した。合計 577 名から回答用紙を回収した。所属学科の内訳は、経済学部経済学科 (EE) が 144 名、経営学部経営学科 (MM) が 82 名、同マーケティング学科 (MA) が 86 名、社会学部社会学科 (FS) が 54 名、国際教養学部アジア学科 (CA) が 47 名、国際教養学科 (CC) が 37 名、地域創造学部地域創造学科 (JJ) が 5 名、心理学部心理学科 (PP) が 97 名であった。なお、学科名を無記入の者は、25 名であった。質問は時間割固定の実施・方法に関するものを 2 項目、時間割固定方式の利点・欠点に関するものを 1 項目、自由記述を 1 項目とした。なお、各設問の文言を担当者用に変更し、体育実技担当教員に対して同様なアンケートを実施した。対象者は 10 名であった。

2) アンケート結果と考察：履修生向けアンケート

<設問 1>

図表 2 に、設問 1 の希望クラス・種目の履修について、五件法で確認した結果を示す。「できた」と「まあまあできた」を合わせると、8割以上の履修生が希望のクラス、種目で履修することができたと答えた。定められた曜日・時限の中で3つのクラス、種目の選択肢があり、概ね、そこで履修生の希望に沿った選択ができたと考える。もっと多くの選択肢（種目）が欲しいという意見も、その他の記述欄で散見されるが、当初、固定化によって懸念していた、「多くの履修生が希望外の種目を選択せざるを得ない」、という状況は回避できたものと思われる。

図表 2 設問 1 の回答数および回答割合

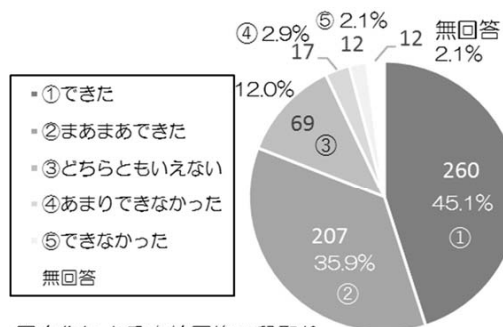


固定化された時限・クラスの中で、希望する種目を履修できましたか？

<設問 2>

設問 2 では、固定化された体育実技履修の段取り（クラス分けガイダンス、履修登録等）についての理解度を確認した。担当教員も固定化の段取りが初めての経験であり、試行錯誤しながら、マネジメントを行った経緯がある。その中で、スムーズに理解できた履修者は45%、まあまあ理解できた者は36%であった（図表 3）。合わせると、設問 1 と同様、8割以上の者から肯定的な回答（スムーズな理解）が得られた。

図表 3 設問 2 の回答数および回答割合



固定化による実技履修の段取りはスムーズに理解できましたか？

<設問 3>

図表 4 と 5 に、設問 3 のカテゴリー毎の回答数とその割合を示した。図表 4 では、体育実技の時間割固定化の良い点（利点）についてのデータを示す。半数以上の履修生が選択した項目は、「選択がしやすい（59.3%）」と「コミュニケーションが取りやすい（55.1%）」であった。ま

た、19%の履修生がいろいろな技術レベルの学生がクラス内にいることを利点としてあげている。そして、11%の履修生が新たな種目にチャレンジする気持ちで授業に臨んでいることが分かる。後者の2点から、クラスの中で履修学生同士が相互に学び合い、高め合っていくピアサポートが実現できる可能性が高いと考える。これまで、全て自由選択の抽選登録の方法によって、実技の技術レベルが高い者が集まるクラス編成が生じていたことを勘案すると、時間割固定化は、クラスの指導、運営面においても利点があるように思われる。

図表 4 時間割固定方式の良い点について（複数選択）

	n =	%
① 曜日・時限が決まっているので選択しやすい	342	59.3
② 同じ学年・学科・クラスの学生同士でコミュニケーションがとりやすい	318	55.1
③ 固定された曜日・時限の中でも2、3の種目クラスを選択できる	102	17.7
④ 抽選登録方式に比べて、レベルの高い者が固まって履修することがなく、いろいろなレベルの学生がクラス内に存在する	110	19.1
⑤ 希望する種目でなくても、新たな種目として新鮮な気持ちで取り組むことができる	68	11.8
⑥ その他（具体的記述）	13	2.3
total	953	165.2
＜その他の具体的意見＞※設問趣旨から外れているものを除外した	回答者の所属	
・自分の取りたい曜日、時限が決まっていたこと	CA	
・楽しく取り込める	CA	
・同じ学年なので知り合いが増えて後のキャンパスライフが楽しくなった。	EE	
・違う学部同期と話せる機会が多くて良い。	EE	
・友達同士でとれるので知らない人とも喋る時にきんちょうせずいけた。	FS	
・初めにこの体育を受けクラスの友達と仲良くなれたし、楽しかった。	MA	
・必修と被らなかったので、確実に1単位	PP	
・単位数	PP	

CA: 国際教養学部 アジア学科、EE: 経済学部 経済学科、FS: 社会学部 社会学科、MA: 経営学部 マーケティング学科、PP: 心理学部 心理学科

悪い点（欠点）については、図表5に示す。約4割の学生から希望する曜日・時限の体育実技クラスを選択できないとの回答が得られた。良い点の「選択しやすい」に相反する回答である。他にも選択肢の少なさ（29.3%）や得意種目で自分の力を発揮できず、低いレベルに合わせざるを得ない（18.2%）、また、思い切り楽しめない（18.9%）という回答が得られた。これらのトータルでの割合は、127.4%であり、良い点の165.2%よりも低い割合を示した。この結果から、どちらかといえば、履修生は時間割固定化を肯定的に捉えていることが窺える。自由記述においては、シューズを保管できる個人専用のロッカーの希望、男女で履修できる種目が異なることへの不満、割り当てられた曜日、時限に配置されている他科目が履修できないことへの不満などが上がっていた。

個別の時間割固定化の利点を伸ばしつつ、これらの欠点の改善に向けた対策を提案していく

体育実技科目における時間割固定化の検証―追手門学院大学1年生の春学期における学科クラスを基準とした時間割固定の事例―

ことが必要であろう。

図表 5 時間割固定方式の悪い点について（複数選択）

	n =	%
① 好きな曜日・時限の体育実技クラスを選択できない	228	39.5
② 他学科、上級学年の学生と交流することができない	91	15.8
③ 固定された2、3の種目クラスの中からしか選択できない	169	29.3
④ クラス内での技術レベルの幅が広い、ゲーム等のレベルを低い方に合わせざるを得ない	105	18.2
⑤ 自分の得意な種目で思い切りスポーツを楽しみたいが、それができない	109	18.9
⑥ その他（具体的に記述して下さい）	33	5.7
total	735	127.4
＜その他の具体的意見＞※設問趣旨から外れているものを除外した	回答者の所属	
・自分の取りたい種目が、他の必修とかぶっててとれなかった。	未記入	
・くつを持ってくるのが大変。ロッカー欲しかった。	未記入	
・バスケがしたかったのに男子しかないところ。	CA	
・受けたい授業がうけれなくなる確率がある。	EE	
・月曜日の1限という時間がやだった。	EE	
・午前に多く午後からでもできるようにしてほしい。	EE	
・クラスに仲良い人と知らない人の間にすきまがあった。	FS	
・その日に必ず学校に行かないといけなくなるので、時間調整ができない。	FS	
・必修とかぶっていた。	MA	
・人気の種目だと取りにくい。	PP	
・人数の調整が難しい。	PP	
・自分はもう片方の体育をしたかったが決まっていたので、できなかったのが残念だ。	PP	
・女子もソフトボールしたい。	PP	
・女子もバスケをしたかった。卓球は地味。高校でした。	PP	
・自由して下さいで、何もできない。	PP	

CA: 国際教養学部 アジア学科、EE: 経済学部 経済学科、FS: 社会学部 社会学科、MA: 経営学部 マーケティング学科、PP: 心理学部 心理学科

＜設問 4＞

設問 4 では、春学期時間割固定に関する方法上の改良点、秋学期の抽選登録方式との比較などについての自由意見を得ることができた。設問の趣旨とずれている回答も挙げられていたが、趣旨に沿った主な意見を図表 6-1 に集約した。

自由記述のキーワードから、およそ 6 つのカテゴリーに分類して集計したところ、固定化方法の改良を望む声が 14% 挙がっていた。詳細は、図表 6-2 の＜改良点＞の欄に示すとおりである。改良点の具体的な内容として種目数の増加、クラス人数の増加、曜日の拡大などが挙げられた。改良を望む意見に「固定化が良い」とする意見と「現状維持」を望む意見を加えると、3 割を越えていた。「固定化が悪い」「抽選が良い」とする意見の合計を上回る割合であった。固定化が好ましくないと思う者は、良いと思うものに比べて少ない傾向にあるといえる。

図表 6-3 の＜その他の意見＞では、種目の具体的な内容や方針に関するもの、成績評価やガイダンスに関するもの、固定曜日・時限の他科目に関するものなどの意見が寄せられた。また、今回のアンケート内容に付随して、秋学期の抽選登録に関する意見も多く挙がっていた。抽選登録の不確定さやリスクについての指摘があった。

今回得られた、改良点の指摘については、今後、担当者間で情報を共有するとともに、その対策について、早急に検討していくことが重要であると考えられる。

図表 6-1 その他の意見の分類と概略

	n =	%
固定が良い	25	11.2
固定が悪い	10	4.5
改良を望む ※下欄＜改良点＞参照	32	14.3
抽選が良い	6	2.7
抽選が悪い	8	3.6
現状維持（1 年春固定・秋以降抽選）	15	6.7
その他 ※下欄＜その他の意見＞参照	47	21.1
特になし	83	37.2
total	226	101.3

↑ 記述内容をこれらの 8 項目で分類。

図表 6-2 ＜改良点＞

クラスを指定ではない方がいいように思えた。/クラスを増やした方がいい。/もう少しクラスを増やし 2 学科共同などにする。/学生番号前半はこの日、後半はこの日ときめるのではなく、この日からこの日から選んでいいようにしたら**選べる種目**も日も今よりは**増える**のでいいと思う。/固定でも時間割として**2 つの中から選べる**など選択肢が欲しい。/2 種目を自分で選べるようにしたいと思う。春学期に取りたい授業と重なっていたので自分で**曜日を選べる**ようにしたいと思う。/もう少し**種目を増やして**欲しい。/もっとスポーツの**選択肢を増やして**ほしい。/もう少し**種目の幅を増やす**ことがいいと思います。/もっと固定するにしても**種目を増やした方がいい**と思う。/もっと種類増やして良いかと思います。/固定方式では授業を取りやすいから良いと思うので、とれる種類の種目を増やしてほしいです。/種目と曜日を増やす。/春学期は秋学期と比べて**種目が少ない**ので、もう少し**増やしても**良いのではないかと思います。/種目をふやしてほしい！！/種目数を増やしてほしい。/枠の拡張をすべき。もしくは辞退することを可能にしてほしい。/人気の種目を 2 クラスに分ける。/固定化するのは良いが、その中でも**自由に選ばせて**ほしい。（例：火金だったら学籍番号が前半は火、後半は金ではなくて自由に選びたい）/好きなスポーツをとれるようにしたい。/人数をもう少し増やす。/人数の幅を増やす。/やりたくても人数的に落とされたりするので、**募集人数を増やして**ほしい。/採用人数を増やしてほしい。/他の学部とかも**混ぜた方がよい**。/他学部の人も一緒にとれるように。/練習メニューがもう少しあれば良かった。/種目は生徒で決めるべき。/春学期はまだ友達も少なく固定された方が良かったけど**曜日・時限は自分達で決めたい**。/種目がありすぎて逆に迷った。/組み合わせも詳しく選びたい。/もう少し履修についてくわしく説明してほしい。/春学期の体育ガイダンスの通達が悪かった。

図表 6-3 <その他の意見>

1 限だと汗をかきタオルでもすべて拭きとれないので2, 3 限以降が良い。/2 限目以降にしてほしい。/チーム編成。/基礎体育に抽選したんですけど、落ちて応用になってしまってみんなレベルが高くてついていけなかった。もうちょっとレベルを合わせてほしい。/ランク分けなどを行い、レベルをあわせる様にする。/学籍番号で分けられると困った。/人数制限をなくしてほしい。/男女比は良かった。/色々な競技を増やしたい。/季節に合った競技を取り入れるべきだと思います。/個人的にバスケとサッカーのゴールデンコンピが欲しいのでバスケの選択肢を作ってほしい、サッカーの枠も増やしてほしいです。/自分のしたことのないスポーツをできるのは楽しいが、やはり自分がしたいものをしたいという気持ちもあった。/種目にもよります。/全部自分達で決められたらいいのにと思いました。/固定でも抽選でもなく、誰でも取れるようにしてほしい。/体育の授業など自由にとれるようにしていきたい。/体育は強制なの?!という疑問がたくさん出ていたので、ちゃんと取りたい人はこの時間割だということをお話していただけたらうれしかったです。/第1回目の授業の前に体育館で種目を選択することがわかりにくかった。/秋学期は語学が多く自分が履修したいと思う授業があまりなかったので春学期はバランスよくしてほしい。/春は木、金あたりは体育あるイメージがなかったので、来年は入れたらいいなと思った。/曜日・時限が決まっていて、体育の単位を確実に取れる安心と、好きな曜日時限にとれないことが少し悩んだ。/私は固定化される以前を知らないの、あまりよくわからない。/先生によって評価方法が異なるのが欠点。/春は基礎作りメインだったが、秋は試合、ゲームがたくさんできた。/間(?)に関しての異議はありません。/春学期の体育で仲良くなった友達5人と秋学期の体育も抽選登録したが自分一人だけ落ちたのでそういうのは体育だし配慮した方がいいと思う。/心理学部でソフトテニスを取ろうとしたけど大切な授業がかぶっていた。/体育に関係なく抽選にするのはやりたいと思って履修してもできない可能性があるので抽選自体がおかしいと思います。/選んでもいない時間になったので非常に困った。/他学部の人とも一緒にとれるように。必修とできるだけかぶらないようにしてほしい。/抽選ではなるべく必修とかぶらないようにしてほしいです。/抽選で落ちないのはよかったが、曜日と時限が選べないせいで選択肢が狭くなった。必ず取るような授業とやりたい種目の体育がかぶるのはあまりよくない気がする。/抽選の場合、人が流れてきて、予想以上の人が来てしまうので対策した方がいいと思いました。/抽選の人数を増やしてほしい。/抽選登録だと人気のところであふれた人が流れてくることで思っていた人数とあまりにも差が出すぎているのが気になった。/落ちた時のリスクが高い。/その他、「楽しい」という意見が10件。

3) アンケート結果と考察：担当教員向けアンケート

図表7に、質問項目と回答人数を示した。時間割固定化履修に関する学生の履修状況の印象を五件法によって、また、自らの印象である、良い点・悪い点を選択肢によって、それぞれ回答を得た。設問1、2では、「できていた」と「まあまあできていた」が過半数を占め、概ね、教員は学生の履修状況を肯定的に捉えていた。また、設問3においては、「良い点」が24件、「悪い点」が14件であり、教員自らの印象においても時間割固定化に対して肯定的な意見が上回っていた。

良い点として、ほぼ全員の教員から、「同じ学科・学年・クラスの学生同士なのでコミュニケーションを活発にとっていた」が選択された。また、半数の教員から「希望する(得意な)種目でなくても、努力してチャレンジする学生が多くいた」が選択された。これらは、いずれも体育実技授業の教育的効果を示すものであり、時間割固定化がもたらす効果として、今後も保持

していくべき要素であると考えられる。

一方、悪い点については、「レベルが同じ者同士で固まってしまう傾向が見られる」が最も多く、半数の教員が指摘していた。①新しい技術の習得に向けて、レベルが高い者が初心者な

図表 7 担当教員向けアンケートの集計結果

設問1. 固定化された時限・クラスの中で、学生は希望する種目を履修できていたと思いますか？

n =

①できていた	2
②まあまあできていた	4
③どちらともいえない	3
④あまりできていなかった	1
⑤できていなかった	0

設問2. 固定化による実技履修の段取りを学生はスムーズに理解できていたと思いますか？

n =

①できていた	4
②まあまあできていた	4
③どちらともいえない	1
④あまりできていなかった	1
⑤できていなかった	0

設問3. 履修生の様子から判断した、時間割固定方式の良い点、悪い点について（複数選択可）

n =

<良い点>

①曜日・時限が決まっているので選択しやすいと思った	6
②同じ学年・学科・クラスの学生同士なのでコミュニケーションを活発にとっていた	9
③固定の曜日・時限の中でも2, 3の種目クラスを選択できる点は学生にとってメリットである	1
④抽選登録方式に比べて、履修者の偏りが少ない	1
⑤希望する（得意な）種目でなくても、努力してチャレンジする学生が多くいた	5
⑥その他 ・一部の学部で基礎体育Ⅰをほぼ全員履修とする履修指導が行われ、履修学生が増えた。 他学部も統一して欲しい。 ・1年生は入学して間もないため最初はよそよそしいが、スポーツを一緒に行うことでコミュニケーションをとることができ、友人関係の形成につながると感じた	2

<悪い点>

n =

①好きな曜日・時限・種目の体育実技クラスを選択できないことによりモチベーションが下がっていた学生がいた（または、履修放棄した学生がいた）	2
②他学科や上級学年との交流で得られるメリットが春学期に得られないのはマイナスである	3
③固定の2, 3の種目クラスからしか選択できないことは、体育全体の履修者減につながる	0
④クラス内での技術レベルの幅が広いため、授業展開が難しい	2
⑤レベルが同じ者同士で固まってしまう傾向が見られる	5
⑥その他 ・④については、教員サイドで授業展開が作れるようにすればOK ・既に新入生演習等で仲よし組のグループができており、その延長で体育でも同じ者同士で固まる傾向を感じた	2

設問4. その他気付いた点や意見

- ・上級生と下級生の幅広い交流が明らかに減ったように感じた
- ・色々な人とのコミュニケーションが行われないため、昨年に比べ活発ではないように思われた

どをピアサポートする、②様々なレベルが集まるチームを編成して対抗ゲームを行うなどの工夫をすることによって、同じレベルの者が固まることを防ぐことができると考える。同時に、これらの工夫によって「クラス内での技術レベルの幅が広いため、授業展開が難しい」という問題も解決できるであろう。

4. 総合考察とまとめ

本学の体育実技授業は、体育館3箇所、屋外3箇所、計6箇所で展開することが施設的には可能である。しかし、体育館の柔道場と屋外のテニスコートおよびゴルフ打撃場は、種目限定的な教場であり、また、雨天時の予備施設として柔道場を含む屋内体育室を使用するため、実際は、各曜日・時限で、最大3クラスを上限としている。また、スポーツ系クラブの活動への配慮から、体育実技科目は全て1～3時限の時間帯に配置している。教員の担当状況に左右されるものの、一日最大で9クラス、一週間で最大45クラスを本学の通常授業期に設定することが可能である。種目によってクラス人数の上限が異なるが、概ね、1クラス35名とすると1,575名の受け入れが可能となる。年間にすると、3,150名である。実際は2017年度の場合、年間履修者数が2,555名(図表1参照)であり、人数枠には約600名の余裕がある。2017年度は全履修者の約7割が1年生の履修であった(2年生以上は401名)。また、この3年間の1年生の履修率は、同学年全体の5、6割で定常化しているため、①1年生の体育実技科目の時間割固定化は、履修率に影響を及ぼさないと考えられる。さらに、これらのデータから、②本学における体育実技科目は、1年生が主体であり、上級学生の身体活動量ならびに体力の維持・増進に寄与していないこと、③本学の4、5割の学生は、体育実技を履修せずに卒業していること、などが推察できる。

一方、高等教育機関における保健体育・スポーツ科目の重要性については、日本学術会議や体育・スポーツ・健康に関わる各学術団体から指摘されている。社団法人全国大学体育連合²⁾は、「体育系学術団体からの提言 2010 21世紀の高等教育と保健体育・スポーツ」をまとめ、以下の4つの事項を全国の高等教育機関に対して要請している。

- 1 学生の健康・体力を維持・向上させ、活力ある家庭や社会を築く能力を育成する
- 2 大学における保健体育の教育効果を再認識する
- 3 スポーツ権を尊重し、スポーツ文化の創造に寄与する
- 4 学位授与の方針と「学士力」に心身の健康を位置づける

1では、身体運動と健康の重要性を学生に十分に理解させ実践させることが強調され、2の

保健体育の教育効果については、「身体面での効果（筋力や持久力の向上、体脂肪率の減少）」「精神面での効果（抗うつ効果、ストレス解消効果）」「社会性・コミュニケーション面での効果」が挙げられている。3のスポーツ権とスポーツ文化の創造については、「高等教育機関においても、体育・スポーツ・身体活動が実践される機会が保障されるべきであり、さらに身体とスポーツに関する文化的社会的課題に対して積極的に教養教育を開発し提供していく義務がある。」という点を強調している。4においては、健やかな生活や社会を築く知識・技術を学ぶことを学位授与の方針に盛り込むべきとしている。すなわち、学生には、大学在学中の継続的な体育・スポーツ・身体活動実践の機会が保障され、その実践効果を獲得・持続するとともに、将来の健やかな生活や社会を築くための知識・技術を学ぶことが求められていることがわかる。このことを背景に体育系学術団体からの提言では、「保健体育の充実に努め、豊かな人間性をそなえた学生を育成することは大学の責務の一つである。」との見解が示されている。

本学での1年生の体育実技科目の時間割固定化は、教務上の利点もさることながら、履修率の向上が得られることが予想されていた。しかし現状では、入学者増による履修人数の増加は見られたが、例年の履修率と同様なレベルであった。前述の提言内容に示されている利点を鑑みると、現在、5、6割の1年生履修率を10割に近づけることが理想であると考ええる。一方、2年生以上の履修者においては、人数が年々減る傾向にあり、大学在学中の継続的な体育・スポーツ・身体活動実践の機会を自ら放棄している学生が増えてきていることが懸念される。1年生の体育実技科目の履修対策のみならず、2年生以上の学年に対する早急な履修対策の必要性が示唆された。

一方、履修上の利点・欠点を探るアンケート調査の結果から、固定化によって履修がしやすいこと、クラス内でのコミュニケーションが取りやすいことなどの利点が多いことが明らかとなった。体育系学術団体からの提言にある「社会性・コミュニケーション面での効果」が時間割固定化によって得られたことが推察される。この効果は、体育実技授業内で学生が主体的に問題を発見し解を見出していく能動的学修（アクティブ・ラーニング）を容易にしたり、他の授業や大学生活全般での学生同士の交流を促すきっかけにもなるであろう。春学期は、新入生の多くが新しい環境への不安を抱きながら学ぶ時期であり、同学科、同クラス内での円滑なコミュニケーションは、こうした不安要素を軽減するものと思われる。

固定化は履修選択がしやすい。しかし種目の選択肢を増やして欲しいなどの意見も多く、これらの点を踏まえて、今後、履修率を高めていくための改善を行うことが肝要であると考えられる。また、体育実技担当教員へのアンケートから、授業運営においては、様々な技術レベルの学生が等しく交流できる学習指導を展開することが求められていることが明らかとなった。

以上のことから、本学における1年生の春学期体育実技科目を各学部・学科の指定する曜日・時限に固定化する履修方法は、1年生の履修のしやすさ、履修生同士でのコミュニケーション

の促進につながり、履修・学習上の利点を得られることが明らかとなった。また、種目の選択肢を増やすこと、担当教員は様々な技術レベルの履修生に対応できるよう、学習指導法を工夫すること、などの課題点が明らかとなった。これらの課題を解決することが、体育実技科目全体(全学年)のより高い履修率につながり、履修生の心身の健康を含む学士力の涵養に貢献にできるものとする。

<謝辞>

アンケート調査にご協力をいただいた、秋学期体育実科目履修学生の皆様、ならびに担当教員の皆様に感謝申し上げます。

<参考文献>

- 1) 田中誠一、海老島均、田中陽子、妹尾江里子(2012) 大学体育の果たす役割についての再考：成城大学における体育教育の現状と課題に着目して、成城大学経済研究(195)、75-92.
- 2) 社団法人 全国大学体育連合編(2010)、体育系学術団体からの提言 2010 21 世紀の高等教育と保健体育・スポーツ(資料編)

<http://daitairen.or.jp/2013/wp-content/uploads/2da1b90b7e73d31340d5b614b30cdde5.pdf>

(参照日：2017 年 12 月 1 日)

Abstract

In this study, we examined timetable fixation based on the number of participants and questionnaire results in the spring semester of the 1st-year, which is thought to have a significant influence on the popularity of physical education subjects at Otemon Gakuin University.

Based on data on physical education students from 2015 to 2017, we confirmed the influence of timetable fixation for the 1st-year spring semester physical education subjects on the number of students. There was little effect on the number of 1st-year students, but it led to a marked decrease in 2nd-year or more advanced students throughout the year.

We conducted a questionnaire survey involving students in practical classes and 37 classes at the end of the fall semester of 2016, and obtained a total of 577 data. Also, we obtained 10 data using a similar question paper from the teacher in charge.

Based on the questionnaire results, the method to fix the timetable of 1st-year spring semester physical education subjects to the day and time specified by each faculty leads to increased accessibility by 1st-year students and promotes communication among students. Therefore, there were clear benefits of the

course method and learning. Also, it was clarified that issues exist, such as increasing choices of sporting events, and devising learning-guidance methods so that teachers in charge can respond to students of various technical levels. It was suggested that by solving these problems related to timetable fixation, we could contribute to the cultivation of each bachelor's capabilities, including the physical and mental health of the students, which would promote a higher registration rate for all physical education subjects (all years).